No.15
2011.3
東邦看護学会
NEWSLETTER

第10回東邦看護学会学術集会を終えて

第10回東邦看護学会学術集会 学会長　齋藤 益子

平成13年12月、東邦看護の連携と質の向上を目指して東邦大学看護研究会は発足しました。年1回の学術集会では、特別講演、シンポジウム、研究発表などをとおして、会員の研究能力の向上や情報交換・交流の場となって参りましたが、10年目を迎え、更なる向上を目指して、今回から「学会」へと脱皮いたしました。その記念すべき第10回東邦看護学会学術集会および10周年記念式典、祝賀会が、平成22年12月19日に、グランドプリンスホテル新高輪に会場を移して開催されました。学会に移行するので参加者が減るのではと危惧しておりましたが、会員の約1/4の450名の参加者を得て盛会裏に終えることができました。これも一重に関係者の皆様のご尽力の賜物と心よりお礼申し上げます。

学術集会は、学会に移行することや会場を学外に設定することもあり、2年前から準備に当たり、委員長の福田美和子先生を中心に運営委員会、実行委員会を組織いたしました。

メインテーマは、「未来に翔ばたく看護－新しい価値の創造－」とし、特別講演とシンポジウムを計画いたしました。

会長講演では「看護の価値と喜び」のテーマで、看護のもつ力、患者とのふれあいで感じる喜び、看護の価値と限りない可能性についてふれ、患者から喜びや感動をもらうことができる看護のすばらしさ、患者の心に寄り添うために患者の心を感じる感性を磨くことの大切さを伝えることができたと思います。

特別講演には、聖隷浜松病院の副院長兼総看護部長の勝原裕美子氏を迎えて「社会の求める看護職のあり方―看護師としてどう成長するか―」というテーマでお話いただきました。講演を通じて参加者はそれぞれ

の経験を省みる機会とし、同時に自らのキャリアパスについて改めて考える材料を提供してもらうことができました。

シンポジウムは、「社会が求める看護実践力とは」というテーマで患者経験者である山登義明氏、医療ジャーナリストの村上紀美子氏、医師である鷲澤尚宏氏、そして認定看護師である久保亜希子氏の4名のシンポジストを迎え、それぞれの立場で「看護実践力」についてお話をいただきました。参加者の多くが自らの実践力を高めていくことが結果として看護が社会に受け入れられていくことになると感じた時間でした。

一般演題は口演と示説をあわせて約30題の発表で、そのうち4演題が昨年創設された学術集会賞として表彰されました。今回は、学校法人東邦大学理事長炭山嘉伸先生ほか大学関係者のご尽力があって、ランチョンセミナーや企業展示の協力も得ることができました。

最後に、大学からホテルへと会場を変えての学術集会でしたが、これまでに蓄積されたノウハウを最大限に活用することで、大きな事業を遂行することができました。改めて10年間の蓄積の重さを感じており、次回への継続を期待しております。

特別講演の座長を終えて

東邦大学医学部看護学科
遠藤 英子

東邦看護学会の構成メンバーの多くは臨床の若い看護師である。より良い看護を患者に提供しようと、日々研鑽している。業務内容はかなり複雑で、いろいろな職種と連携し、ミスは許されない緊張した状況である。そのような中で、看護師としてどのように成長していったらよいか、社会の中で看護はどのように評価されているのだろうか。日々がんばっている若い看護師たちにエールを送って欲しいとの学会の企画で聖隷浜松病院 副院長兼総看護部長である勝原裕美子氏に「社会の求める看護職のあり方―看護師としてどう成長するか―」をテーマにお話して頂いた。

私達の仕事は看護を必要としている人たちに対し、その人の人生に入り込み、人の生きること、死ぬこと、生活することに関わっていくことである。そして、自ら看護を語り、社会の力になっているということを自ら努力して語らなければならない。

勝原 裕美子氏

社会が求めるから看護があるのではなく、看護が必要だから看護がある。人と向き合う前に自分と向き合い、ひとりひとりの看護師が自分の言葉で言えるようにならないといけない。つまり、「自分の可視化」をしなければならない。後継者を育てるのも我々看護師で、看護の本質を語れるのも看護師自身である。

誇りをもってやれていることを社会に向けて語ることが必要である。と、我々にエールを送って頂いたように思う。

シンポジウムの座長を終えて

東邦大学法人本部看護企画室
出射 明子

「社会が求める看護実践力とは」と題して、４名にお話を頂いた。山登義明氏は、病気を受容するまでの葛藤の中で、看護師との「普通の会話」が社会と繋がっていることを実感させられて自分を取り戻した。医療ジャーナリストの村上紀美子氏は、海外での取材や生活を通して、日本流の穏やかな看とりケア。患者の“本当の気持ち”にコミュニケートし、本人にしか解り得ないことは確かめればよい。看護業務を“患者にとって大事なことかどうか”の視点で見直しシンプル化してほしいと期待を述べた。看護師長の久保亜希子氏は「患者・家族のニーズにこたえるためには」チーム医療の中で、患者の立場に立ち、患者・家族がなにを望んでいるのか自己決定を支える。医師の鷲澤尚宏氏は NST 活動をとおして、看護師から得られる情報はきわめて重要とそれぞれの立場から、看護に求める実践力について話していただいた。

２時間をどのように有意義なシンポジウムにするか・・と事前打ち合わせをしていたが、それぞれのシンポジストの感動的な話に、座長の立場を忘れて引き込まれていた。シンポジストの村上さんにリードしていただいた感はあるが、充実した時間をすごすことができた。フロアからの発言が少なかったのは大変残念ではあったが、「看護職に期待されているもの」を考える機会になったのではないでしょうか。

学術集会賞受賞者の声

松永 佳子
（東邦大学医学部看護学科）

【プレゼンテーション】にこだわって

研究発表の「スタイル」にこだわらず実践したことを「伝える」ことを大事にしたいと思い、ポスター発表をしました。病院と施設がどのようなきっかけで出会ったのか、顔を合わせることで何が変わったのか、出会ったことでどのような発展があったのかという実践報告ですが「一目でわかる」、「プロセスがわかる」ことを目指しました。会長講演にもありましたが「惹きつける力」を評価していただいたのだととても嬉しく思っています。

林 華子
（東邦大学医療センター佐倉病院 NICU/GCU）

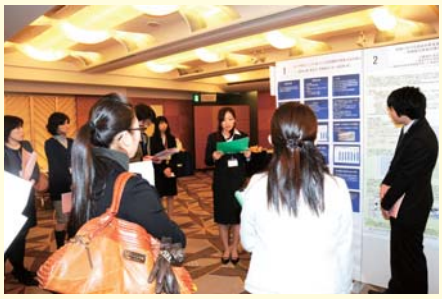
この度は学術集会賞を頂き有難うございました。私達は先行研究を受け、新病棟での音環境について調査し、改善に向けた取り組みを行いました。看護師だけでなく医師やヘルパーにも研究の内容を理解していただき、病棟全体で音環境の改善を図っております。早期産児において音環境は児の今後の成長発達に大きな影響を与えます。そのため、今後も継続して研究を行い、児に優しいNICU を目指していきたいと思います。

川嶌 優衣
（東邦大学医療センター佐倉病院 7 号館西病棟）

当病棟では「移動式局所脱臭機導入による消臭効果」というテーマのもと、A社で開発された脱臭機「ナスカル」を使用し、オムツ交換の際に発生する臭気を軽減できるかを検証しました。実験に協力していただいた患者様・スタッフなど多くの方のご協力の結果、この研究発表に学術集会賞を頂く事ができました。研究で終わりにすることなく、日々の業務の中で脱臭機を活用し、快適な療養環境を提供できるようこれからも努力していきたいと思います。

今野 聡子
（東邦大学医療センター大森病院 2 号館 4 階東病棟）

今回、私達が研究を行う中で苦労した事は、大量のデータを集め分析することでした。しかし、収集したデータを分析しそれを臨床に活かしていく事の重要性を学びました。また、本研究から今後、与薬事故減少につながるための方向性を見出せました。それだけでも大きな成果があったと喜んでいたところ、本賞の受賞は大変嬉しく思います。これを励みに、今後もよりよい看護を提供できるよう精進していきたいと思います。



研究奨励金受賞者の声

山田 美穂
（東邦大学医療センター
大森病院救命救急センター）

この度は、東邦看護学会より研究奨励金を「透析用カテーテル管理における感染対策の実態に関する研究」に対して授与していただき有難うございました。看護学科の遠藤教授と安岡助教の指導をいただいて透析用カテーテル関連の研究を開始し 4 年が経過しています。免疫力の低下した状態である透析患者が安全な医療が受けられるように実態を調査し、看護師のケアの一助になる成果をご覧頂けるようにしたいと考えております。

津野 陽子
（東邦大学医学部看護学科）

この度は研究奨励金を受けることになり、感謝申し上げます。研究課題は、「『保健師教育の技術項目と卒業時の到達度』の学生による自己評価」で、学生の学習評価の分析を行います。保健師基礎教育は、学生の実習受け入れ制限や教育期間の延長などに伴い転換期にあります。学生の学習評価により、教育評価やカリキュラムを改善するための貴重なデータを得、保健師教育にとって有意義な研究となるよう、共同研究者とともに研究に励む所存です。

10 周年記念祝賀会

10 周年記念祝賀会が盛大に行われました

第11回東邦看護学会学術集会開催に向けて

第 11 回東邦看護学会学術集会大会長
竹内 千恵子
（東邦大学医学部看護学科、看護キャリア支援センター）

私は現在 4 月に発足した看護キャリア支援センターで、臨床の方々や教員と看護の質の向上を目指した様々な取り組みをしています。そこで再認識したのは基礎教育と臨床、及び臨床間の教育の連携の重要性です。2011 年 12 月 17 日看護学科で開催予定の学術集会では、様々な場における連携に焦点を当て、立場を超えて共に考え語り合う場にしたいと思います。多くの会員の皆様のご参加をお待ちしています。

編集後記

盛況に終わった学術集会．ポスターや口演での研究発表とディスカッション，緊張感と熱気という現場の雰囲気が，今回のニュースレターでお伝えできたらと思っています．研究会が学会になり，東邦以外の方々にもご参加していただくことは，東邦看護の発展の必然だったと思います．今後の学会の発展に広報としても寄与できるよう企画運営していきたいと思っています．皆様のご意見をお待ちしています．　（広報委員長：横井郁子）

NEWS LETTER
ニュースレター事務局
〒143-0015 東京都大田区大森西 4-16-20
TEL 03-3762-9881
FAX 03-3766-3914